

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
創刊号／1958(昭和33)年3月			
	発刊の辞	—	1
	謡曲「高砂」のモチーフ	大場俊助	2-7
	「しじま」について	安川定男	8-11,7
	黒川能の研究—詞章に対する一考察—	石井辰雄	12-14,18
	「万葉集三二六五」考	佐野正巳	15-18
	千葉方言におけるいわゆる「語中K音の脱落現象」の調査(中間報告)	中村通夫 荒巻祺慧・大場勲・亀山明生・ 佐藤吉之介・佐野正巳・ 島田貞男・谷光忠彦・浜村一也・ 牧山義正・山岡俊文・ 四方田豊子	19-27
	研究旅行記	中村政行	28
	みちのくの旅余聞	宮原直寛	29
第2号／1959(昭和34)年3月			
	巻頭言—研究紀要などの在り方について	—	—
	「家聞かに」新考	森本治吉	1-7
	門部王放—天平作家研究—	佐野正巳	8-16,36
	西鶴に於ける独吟形式の本質	竹石弘二	17-24
	作品にみる一茶性格の背反性	黄色瑞華	15-36
	千葉方言調査の旅	坂上弘之・福田真久	37-38
	みちのくの記	松本建彦	38-39
	関西山陰地方研究旅行記	遠藤益之助	40-41
	旅の印象	重藤チハヤ・柳沼美紗子	41-42
第3号／1960(昭和35)年3月			
	紫式部日記と宇治十帖	安川定男	1-10
	今昔物語集に於ける「豈(アニ)」の用法について	谷光忠彦	11-24
	堤中納言物語—「はなだの女御」の題名について—	森口年光	25-37,10
	芭蕉論	土田梨津子	38-44
	「堀河波鼓」における際物的性格	山田貞夫	45-55
	出発点の詩人—中原中也小考—	伊藤久美栄	56-66
第4号／1961(昭和36)年2月			
	季吟書翰考(一)	野村貴次	1-11
	言語主体の拡大解釈についての一考察	福田真久	12-20
	西鶴置土産研究—悲劇的世界の形成について—	中村俊彦	21-27
	再び一茶の祖先について—新資料による越後頸城長森説—	黄色瑞華	28-34
	大伴家持論稿—抒情詩の基調について—	川上富吉	35-43
第5号／1962(昭和37)年2月			

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	「恨の介」の世界	竹石弘二	1-7
	一茶のノスタルジア—その継子文学の背後にあるもの—	黄色瑞華	8-13
	言語の成立について—特に拡大解釈された主体交錯から—	福田真久	14-24
	「おあん物語」について	中村通夫・菅井時枝・蟹江秀明	25-44
第6号／1963(昭和38)年3月			
	三論絵詞とその本文(翻刻)	山岸徳平	1-10
	万葉集「八多籠」考—田子の浦の意味—	佐野正巳	11-12
	大伴家持の抒情詩について—その語彙論的私見—	川上富吉	13-18
	堤中納言物語の「花桜(を)折る少将」名義考	森口年光	19-31
	数量的にみた一茶の俳句	黄色瑞華	32-41
	言語の本質について(上) —特に言語・行動の連続による言語観を中心として—	福田真久	42-47
第7号／1964(昭和39)年3月			
	北村季吟書翰考(二)	野村貴次	1-8
	萬葉集東歌に於ける譬喩	中川郁	9-22
	太平記に於ける菊池氏—博多日記を中心として—	蟹江秀明	23-26
	堀辰雄試論	山本陽一	27-40
	今昔物語における「ナニ」の用法について	谷光忠彦	41-52
第8号／1965(昭和40)年3月			
	『愚管抄』と『神皇正統記』以後	塚本康彦	1-8
	にほふ美意識考—大伴家持小論—	川上富吉	9-18
	古今集の懸詞	沢本頼雄	19-25
	広本方丈記と略本方丈記	長崎健	26-32
第9号／1966(昭和41)年3月			
	古代人の未可分的世界観について	森本治吉	1-5
	萬葉集みやび考—階級的美意識について—	川上富吉	6-15
	万葉集卷十三筆録者考	坂入征男	16-23
	高村光太郎の戦争詩	請川利夫	24-34
	梶井基次郎小論—「檸檬」以前と「檸檬」の成立について—	富田直子	35-43
	言語の本質について(中) —特に言語・行動の連続による言語観を中心として—	福田真久	44-50
第10号／1966(昭和41)年9月 中央大学国文学会創立十周年記念特輯号			
	十周年感語	森本治吉	—
	「問はず語り」雑感	吉田精一	1-7
	上田秋成の小説論	大場俊助	8-24
	天若日子神話—成立順序・成立過程・資料性—	服部旦	25-34
	唐詩選と萬葉の長歌—登楼・登高の詩と望国の歌の構成を通して—	亀山明生	35-42

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	代作歌人としての憶良	大里恭三郎	43-52
	大伴家持ますらを放—その語彙論的私見—	川上富吉	53-69
	万葉集卷十三編纂考	坂入征男	70-78
	広本方丈記攷	長崎健	79-85
	中江藤樹の文学観と詩	吉澤康夫	86-94
	言語の本質について(下) —特に言語・行動の連続による言語観を中心として—	福田真久	95-106
第11号／1967(昭和42)年12月			
	巻頭言—国文学・国文学者の変遷	森本治吉	—
	語彙別記・語彙活語指掌の俗語・俗語訳	中村通夫	1-7
	諾冉二神の系統	服部旦	8-22
	杜甫と憶良—社会派作家としての比較—	亀山明生	23-28
	戦時期における光太郎の「故郷」意識	請川利夫	29-34
	「醒睡笑」の諸本について	菅井時枝	35-41
	言語主体の拡大解釈についての理論的研究	福田真久	42-53
	国文学会研究旅行記(昭和四十二年度)	本田義則・田中実	63-68
	文学散歩道報告	山田博起	68-69
	「中央大学国文」既刊号論文総目録	—	71-72
第12号／1968(昭和43)年10月			
	思いつくままに	吉田精一	—
	家集と日記—更級日記の場合—	犬養廉	1-5
	「伊夜之家餘其騰」攷—萬葉集四五—六番歌の解釈と鑑賞をめぐって—	川上富吉	6-15
	太平記に現われた菊池氏—菊池武光を中心にして—	蟹江秀明	16-23
	短詩型文学における一つのエポック—中世詩に関するノート—	白戸洋	24-33
	「おくのほそ道」構成論—象潟・越後路・市振を中心として—	大畑健治	34-41
	『桃李』論—その類想性をめぐって—	竹石弘二	42-51
	正岡子規論—近代の眼—	大里恭三郎	52-63
	続「国生み神話」批判—島生みの場—	服部旦	64-96
	新会員歓迎会報告	森捷秀	102-103
	「中央大学国文」既刊号論文総目録	—	105-106
第13号／1970(昭和)年3月			
	告別のことば	森本治吉	—
	フランスの「新批評」	安川定男	1-7
	杜甫と憶良—人間写実の方法と基盤—	亀山明生	8-16
	万葉歌の表現構造分析—アンビギュイティとイメージアリーを中心として—	吉岡泰夫	17-26
	自撰私家集の一様相—赤染衛門集の大江為基をめぐって—	西森真太郎	27-37
	歌人阿仏尼	井桁和子	38-49

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	心敬晩年の居跡について	兼子道弘	50-57
	観劇報告並びに鑑賞—河内山と直次郎・三千歳	柳沢栄子	69-70
	文庫見学報告	滝沢マサ子	71-72
	文学散歩報告	足立忠夫	72-73
	森本治吉先生著書目録	—	75-76
	森本治吉先生主要雑誌論文目録	—	77-81
第14号／1970(昭和45)年12月			
	大場俊助先生のご逝去を悼む	安川定男	—
	啓示と創造のあい間	大場俊助	1-2
	醒睡笑における版本の四つ仮名混乱について	菅井時枝	3-13
	呪禱の文学—ウケヒ—	関口静雄	14-26
	「徒然草」における係助詞—「こそ」・「ぞ」の偏在について—	木村健	27-35
	鳥島方言雑考	後藤剛	36-44
	『行人』の主題	竹腰幸夫	45-55
	『其雪影』評釈—欠け欠けての巻—	竹石弘二	56-69
	〈書評〉黄色瑞華著『一茶小論』	大畑健治	70-71
	〈書評〉福田真久著『芭蕉の自我と救い』	竹石弘二	71-73
第15号／1971(昭和46)年12月			
	偶感	中村通夫	1-2
	山部赤人の技法—象山の鳥声—	亀山明生	3-11
	「三河二見道」考	竹尾利夫	12-21
	更級日記の成立—構造分析を通して—	小林英範	22-30
	略本方丈記をめぐる問題	長崎健	31-40
	山陽と細香—一つの愛のかたち—	江橋珠子	41-52
	虚無と幻の楽器—梶井基次郎を求めて—	池村憲章	53-61
	〈書評〉請川利夫著「高村光太郎」	池川敬司	62-63
	〈書評〉福田真久著「松尾芭蕉論—晩年の世界—」	山崎省次	63-67
	〈書評〉塚本康彦著「ロマン的国文学論」	安川定男	67-69
第16号／1973(昭和48)年3月 近代文学小特集			
	藤原明衡の壮年時代—省試をめぐる事件を中心に—	大曾根章介	1-9
	『神之崎狭野乃渡尔』私考	一木一郎	10-19
	横光利一と昭和文学史—内海伸平の論を中心に—	神谷忠孝	20-27
	『こゝろ』—二つの自殺をめぐる—	竹腰幸夫	28-38
	『坑夫』論序説	熊木哲	39-47
	龍膽寺雄ノート	古俣裕介	48-56
	『斜陽』試論	平泉道子	57-65

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	三好達治の戦争詩	池川敬司	66-75
第17号／1974(昭和49)年3月			
	俳諧経済社会学	今栄蔵	1-8
	人麻呂における叙景性—人麻呂歌集非略体歌を中心にして—	竹尾利夫	9-19
	狭衣物語冒頭部分の一考察—藤と山吹をめぐって—	久下晴康	20-31
	小林秀雄の小説について—内部の変容が意味するもの—	浜崎俊文	32-40
	『わがひとに与ふる哀歌』—イロニイとしての抒情詩—	中村一基	41-50
	『山月記』小論	成田昭博	51-60
	『感動の再建』覚え書	中川皓司	61-71
第18号／1975(昭和50)年3月			
	八代集における「月」についてのノート	井上三千代	1-9
	蜻蛉日記上巻欠文部に関する試論	曾根誠一	11-20
	宮嶋資夫小論—「坑夫系」作品を中心に—	熊木哲	21-34
	卒業論文の動向について	神谷忠孝	34
	高見順論	小高常代	35-43
	高橋和巳—その敗戦体験の意味再確認—	奥出健	44-52
第19号／1976(昭和51)年3月			
	『あけ鳥』蕪村連句評釋—頭へやの巻—	竹石弘二	1-13
	宣長歌論と定家・『新古今集』—契沖歌学の意義を通して—	中村一基	14-25
	浅原六朗ノート—新社会派文学について—	古俣裕介	26-33
	戦時下の高見順—「芸術的抵抗」への疑問—	中川皓司	34-43
	『トカトントン』論	鶴屋憲三	44-52
第20号／1977(昭和52)年3月 中央大学国文学会創立二十周年記念特輯号			
	あの頃のこと	安川定男	—
	後期近世語資料としての聯珠詩格訳註	中村通夫	1-6
	蜻蛉日記上巻は何故に安和元年で区切られたのか —「初度初瀬詣で」を中心としての一解釈—	曾根誠一	7-16
	源氏物語の表現構造—「桐壺」から「帚木」へ—	成嶋国彦	17-25
	狭衣物語の創作意識—六条斎院物語歌合に関連して—	久下晴康	26-36
	石川啄木の社会主義思想のめばえについて —明治四十一年に日記が二種書かれた理由について—	目良卓	37-46
	梶井基次郎の〈闇〉をめぐって—『闇の絵巻』の成立を中心に—	熊木哲	47-58
	三好達治の言語観—自由詩・散文詩を通して—	池川敬司	69-67
	「リオ・グランデ」論	外尾登志美	68-78
第21号／1978(昭和)53年3月			
	中世和歌の方法—正徹の統辞破格表現を通して—	濱中修	1-11

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	狂言における地藏菩薩	池田英悟	12-19
	「冥途の飛脚」改作について	根本雅司	20-30
	梶井基次郎小論—その文学と精神の彷徨—	竹腰道子	31-40
	葉山嘉樹論—晩年の作家活動を中心に—	平野厚	41-49
	中村正常の文学について	古俣裕介	50-60
	太宰治における志賀直哉の位置 —作品にあらわれた志賀直哉を手がかりとして—	鶴谷憲三	61-70
	〈書評〉安川定男著「作家の中の音楽」	伊原史子	71-72
第22号／1979(昭和54)年3月			
	古今集歌「かつ見る人に恋ひやわたらむ」—「かつ」の解釈をめぐって—	服部一枝	1-12
	枕草子私論—特殊構造的性に関する一考察—	松森弘幸	13-20
	『狭衣物語』の構造—「常磐の尼君」を軸として—	堀口悟	21-32
	萩原朔太郎小論—内部疾患と詩法の推移—	須永光美	33-40
	椎名麟三論—出発時における問題—	志村光子	41-52
	漢文訓読上の二三の問題	安保博史	53-57
	〈翻刻〉『右大臣家歌合』	曾根誠一	58-66
	〈書評〉暉峻康隆監修『座の文芸蕪村連句』	大畑健治	67-69
第23号／1980(昭和55)年3月			
	中世小説における「笛」	濱中修	1-9
	稻掛棟隆年譜考—本居宣長の門人伝—	中村一基	10-28
	金子喜一—その米国時代—	熊木哲	29-42
	『五色墨』評釈—葬やの巻—	和田豊次	43-54
	「中央大学国文」既刊号論文総目録(第二十～二十二号)	—	54
第24号／1981(昭和56)年3月 中村通夫先生古稀記念号			
	中村通夫先生を送る	安川定男	1-3
	『歌格類選』の俚言	後藤剛	5-14
	「はた」考—富士谷成章の学説をめぐって—	中島敦史	15-24
	口語文の成立時期について—明治時代の新聞を資料として—	丹治芳男	25-32
	市原市五井周辺の言語調査—消えゆくK—h現象をさぐる—	岡野幸子	33-44
	嵯峨帝と漢詩人達	本間洋一	45-57
	古今集三六三番歌「山した風」の解釈をめぐって	服部一枝	58-69
	「酒呑童子」論	濱中修	70-79
	平沢計七ノート—附 参考資料文献目録—	渡辺哲夫	80-93
	『同時代ゲーム』における方法論の試み	渥美誠一	94-104
	『五色墨』評釈—これは／＼の巻—	矢野正照	105-113
	〈聞書資料〉高村智恵子さんのこと	請川利夫	114-116

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	〈書評〉伊藤博著『源氏物語の原点』	堀口悟	117-118
	中村先生の思い出	谷光忠彦・福田真久・ 山田美紗子・斉藤宗明	119-122
	中村通夫先生略歴・著述目録	—	123-125
第25号／1982(昭和57)年3月			
	『新撰字鏡』の「借音」について	馬淵和夫	1-9
	坂口安吾『白痴』論	大里恭三郎	10-16
	「坂口安吾」論 —「桜の森の満開の下」周辺から、「巧みに殺された真実」を探って—	高橋好弘	17-26
	『智恵子抄』に於ける光太郎の愛 —「山麓の二人」「レモン哀歌」を中心に—	岡本博明	27-35
	芥川龍之介初期作品の世界—「煙草と悪魔」を中心とした覚え書—	大高知児	36-44
	蔦屋重三郎論—天明三年前後の文学・出版活動をめぐって—	鈴木俊幸	45-53
	大坂勸進能の展開—年表を中心に—	池田英悟	54-62
	足利義尚文化活動事蹟年譜	綿抜豊昭	63-71
	『五色墨』評釈—名月やの巻—	和田豊次	72-83
	〈書評〉安川定男・上杉省和編『作品論 有島武郎』	奥村裕子	84-85
第26号／1983(昭和58)年3月			
	万葉集一六七番日並皇子殯宮挽歌に於ける「世者」訓読についての試論	伊東光浩	1-9
	「ことのは」考—『古今集』仮名序における—	服部一枝	10-18
	『俊成卿女家集』について—その巻頭第一首をめぐって—	峰岸和弘	19-27
	岩崎白鯨論—文学活動及び啄木との交流—	目良卓	28-34
	初期「新しき村」の性格について—木村莊太の視点から—	鈴木久仁夫	35-43
	保田與重郎論—〈大衆〉概念の所在をめぐって—	長沢雅春	44-52
	〈書評〉今栄蔵校注『芭蕉句集』	大畑健治	53-54
第27号／1984(昭和59)年3月			
	菊の賦詩歌の成立覚書—本朝における古今集前夜までの菊の小文学史	本間洋一	1-14
	足利義尚撰『新百人一首』について	綿抜豊昭	15-21
	尾張蕉門の展開(一)—『阿羅野』の俳壇史的存在像をめぐって—	安保博史	22-40
	「イーハトーブ」についての—考察—語の成立とその使用について—	安藤恭子	41-53
	宮沢賢治における「政治と文学」	田中一生	54-62
	織田作之助の戦後	金子俊子	63-71
	倉橋由美子論—「反世界」構築の方法—	菅原整	72-80
	仮名草子の文末表現—中世恋愛譚的作品群に於ける—	新田文江	81-90
	中古物語文学における形容動詞の語構成について	柄澤明子	91-100
	〈書評〉安川定男著『悲劇の知識人 有島武郎』	大里恭三郎	101-102
	〈書評〉大會根章介・堀内秀晃校注『和漢朗詠集』	細田季男	103-104

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
第28号／1985(昭和60)年3月			
	異種『蒙求』覚え書き—日本における『蒙求』享受の一現象—	相田満	1-10
	『江都督納言願文集』と唱導文献	細田季男	11-28
	和泉式部日記管見	金井利浩	29-40
	俊成卿女歌の「月」「露」「袖」—その歌材統計に基づいて—	藤野勝江	41-49
	『金山寺大黒伝記』評釈	近世文学ゼミ	50-68
	萩原朔太郎論—定本『青猫』に関して—	柏倉保史	69-78
	立原道造における詩集と音楽 —第一詩集『萱草に寄す』を中心として—	井上聡	79-88
	吉本隆明試論—「禁制論」を手がかりにして—	長沢雅春	89-99
	使役表現の意味構造	伊東光浩	100-120
	〈書評〉渡部芳紀著『太宰治 心の王者』	田中一生	121-122
	〈書評〉黄色瑞華著『人生の悲哀 小林一茶』	大畑健治	123-124
	〈書評〉川上富吉著『万葉歌人の研究』	竹尾利夫	125-126
	〈書評〉大里恭三郎著『井上靖と深沢七郎』	熊木哲	127-128
第29号／1986(昭和61)年3月			
	中世連歌における「月」と「花」	齋藤尚美	1-7
	『兼如筑紫道記』について	綿抜豊昭	9-17
	「謡俳諧」五種と謡曲—江戸貞門俳人たちの作品より—	池田英悟	19-28
	『曠野後集』—荷今の俳諧道の岐路—	安保博史	29-37
	萩原朔太郎—行為の人・無為の人—	鈴木昇	39-48
	有吉佐和子論—“偉大なる母性”の文学	杉田英一	49-57
	近世初期小説に於ける係結の表現効果—「ぞ」「こそ」の場合—	新田文江	58-65
第30号／1987(昭和62)年3月 第三十号記念特輯号			
	第三十号の節目を迎えて	今栄蔵	—
	平安時代の訓点資料における古体仮名の伝承について	築島裕	1-26
	遊行女婦「児島」の袖	亀山明生	27-33
	『擲金抄』の素材について—注文・語彙をめぐって	本間洋一	34-56
	『蜻蛉日記』の執筆動機	大塚進一	57-67
	猪苗代兼説とその周辺—中央と地方をつなぐものとして	綿抜豊昭	68-75
	〈芭蕉連句研究ノート1〉天和調の一断面—「妖怪趣味」をめぐって—	安保博史	76-83
	唐来三和年譜稿—付・二世三和作品—	鈴木俊幸	84-96
	岸田杜芳について	地引薫	97-108
	『向田邦子』論	永野恭子	109-122
	日本語教育について	古俣裕介	123-132
	『おくのほそ道』諸注とところどころ不審抄(その一)	今栄蔵	133-143

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	「中央大学国文」既刊号論文総目録	—	144-151
第31号／1988(昭和63)年3月 馬淵和夫先生古稀記念号			
	馬淵和夫君を送る	安川定男	1-3
	漢文訓読と古辞書の古訓点	築島裕	4-13
	万葉集における「心・情」の訓字—その用字意識をめぐって—	板垣徹	14-29
	堤中納言物語覚書—「逢坂こえぬ権中納言」文脈理解存疑—	金井利浩	30-41
	色彩と感情—平安時代の女流作家による散文作品において—	中狭幸	42-57
	possibleの「べし」存疑—八代集に於ける—	伊東光浩	58-73
	「ケリ」の変遷についての一考察	鈴木淳一郎	74-86
	接続詞の研究—江戸中期の文体による相違—	伊良波常美	87-103
	現代語における可能表現—一段系可能動詞をめぐって—	中込潔人	104-124
	変化の結果を表わす「ニなる」と「トなる」について —現代日本語の場合—	朴在權	125-143
	韓・日両言語における「助詞」の比較対照研究 —格助詞「の」と「wi」の場合—	張正來	144-151
	初期保田與重郎論(二)—「言葉」と「作家的危機意識」について—	長沢雅春	152-162
	太宰治における「男性」と「女性」	西田りか	163-172
	馬淵和夫先生の思い出	新田文江・朴在權・ 石純姫・小林恭治	173-180
第32号／1989(平成元)年3月			
	本邦古社寺に伝存する漢籍仏典と国語史学	築島裕	1-9
	「江談抄」について —『江談抄』第六「江都督安樂寺序間事」に表われた匡房の性格—	小野泰央	10-18
	藤原俊成筆『廣田社歌合』における藤原定家の表記法との関連性について	名倉隆雄	19-28
	猪苗代兼与とその周辺 —久保英明氏蔵『賦何人連歌』をめぐって—	綿拔豊昭	29-35
	「かしはばやしの夜」— <small>く</small> 即興の祭り—	安藤恭子	36-46
	宮沢賢治論—現空間と異空間の狭間で—	矢島真由美	47-55
第33号／1990(平成2)年3月 安川定男教授古稀記念号			
	安川定男先生を送る	今栄蔵	4-6
	〈最終講義〉モラル・バックボーン(要旨)	安川定男	7-13
	万葉集における言語次元と言語主体	福田眞久	14-21
	「ゆかし」の源流としての万葉歌	亀山明生	22-30
	万葉集における「将」字の用法—家持歌の用字位相を中心として—	板垣徹	31-44
	『土左日記』の表現の揺れについて —土佐国の人々との別離から船旅への転換部の検討—	曾根誠一	45-59
	和泉式部日記応永本系統本文本文整理の試み(中)	金井利浩	60-69
	源氏物語の漢語—建築物に関する字音について—	山岡俊文	70-81
	観智院本類聚名義抄と遊仙窟の文選読みについて	杉谷正敏	82-89

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	和歌と漢詩文—中古・中世の私家集をめぐって—	本間洋一	90-102
	『宇治拾遺物語』における説話間の連想について	嶋村直子	103-127
	阿仏尼—その人物像をめぐる問題—	長崎健	128-139
	猪苗代兼郁の「連歌手仁越波伝受」について	綿抜豊昭	140-148
	烏丸光廣の歌壇活動—御会資料をとおして—	菊地明範	149-165
	『難挙白集』に関する一考察	岡本聡	166-174
	『父の終焉日記』の成立時期をめぐって	黄色瑞華	175-182
	『古今和歌集鄙言』の仮名遣い—オ・ヲの場合—	後藤剛	183-189
	「宿魂鏡」論—「幻鏡」を中心に—	李淙煥	190-200
	宮沢賢治論—風の又三郎の世界—	武田まり	201-212
	久生十蘭の戦後—「ハムレット」を手がかりにして—	長谷川達哉	213-221
	合字に関する一試論—ニ(シテ)・ㇿ(コト)・ニ(トモ)・ニ(トキ)を中心に—	谷光忠彦	222-233
	安川定男教授の思い出	牧山義正・永友正信・ 山崎省次・渡辺美代子・ 藤田裕子	234-241
	安川定男教授略年譜・著述目録	—	242-247
第34号／1991(平成3)年3月			
	〈文学〉メディアは生き残れるか	宇佐美毅	1-12
	「給ふる」についての一考察	石川菜穂子	13-24
	定家本古今集の作者名の表記様式について —伊達本・高松宮本における書き分け—	徳永良次	25-37
	—葉と鏡花の小説における擬態語・擬声語	佐藤なぎさ	38-47
	斎藤茂吉論—「赤光」に始まるその作歌人生—	岩井都	48-58
	稲垣足穂論—飛行機乗りの倫理—	内山政純	59-67
第35号／1992(平成4)年3月			
	隠退之弁	今栄蔵	1-2
	日本書紀の平安時代古訓から見た釈日本紀の秘訓の一側面	尹幸舜	3-16
	後江相公—大江朝綱小伝—	小野泰央	17-25
	『夜の寝覚』主人公中の君の兄弟姉妹関係について	長沼扶佐子	26-34
	戯作と蔦屋重三郎(上)	鈴木俊幸	35-43
	実録体小説の一資料について	綿抜豊昭	44-47
	「郷土望景詩」論—郷土への怒りと愛執—	権点淑	48-56
	伊藤博先生を悼む	築島裕	57
	伊藤博教授略年譜・著述目録	—	58-59
	伊藤博先生の思い出	堀口悟	60-61
第36号／1993(平成5)4年3月			
	「よのなかをなににたとへむ」歌連作—源順を中心にして—	小野泰央	1-9

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	日本書紀の卜部系の訓法の性格 —日本書紀諸古写本と釈日本紀の秘訓との比較において—	尹幸舜	10-24
	講義と聞書及びその言語意識とについて —明恵と喜海との言説をめぐって—	土井光祐	25-39
	お廷の担うもの—『明暗』小論—	松岡京子	40-50
	種田山頭火と自然—海を中心にして—	橋本直	51-59
	韓国の字典における日本国字	曹喜澈	左1-11 (82-72)
	〈書評〉板垣徹著「万葉表記・文体論叢」	白瀬真之	60-62
	〈書評〉古俣裕介著『〈前衛詩〉の時代—日本の一九二〇年代』	長谷川達哉	62-64
	〈書評〉安川定男編「昭和の長編小説」	駒ヶ嶺泰暁	64-65
	〈書評〉大高知児編著『『神聖喜劇』の読み方』	長沢雅春	66-67
	〈紹介〉今栄蔵著「芭蕉伝記の諸問題」	坂本優	68-69
	〈紹介〉渡部芳紀著「宮沢賢治 名作の旅」(解釈と鑑賞別冊)	西田りか	70
	〈紹介〉綿拔豊昭著「越中の連歌」「和漢書覚え書き」	岡本聡	71
第37号／1994(平成6)年3月 大曾根章介教授追悼号			
	故 大曾根章介先生	長崎健	2-3
	万葉集の数字表記—人麻呂の用字意識を中心に—	竹尾利夫	4-13
	「旧都歌」試論—赤人三二四番歌の位置付けを中心に—	白瀬真之	14-25
	大伴家持の防人歌受容についての考察	高橋誠	26-33
	堀川大殿と狭衣	堀口悟	34-40
	後撰集時代前後の和歌と白楽天	小野泰央	41-51
	文学的資料としての『職原抄』 —国文学研究資料館蔵『職原抄聞書』の視座から—	相田満	52-59
	『幻夢物語』考	濱中修	60-67
	文明二年奥書本『海人手古良集』の本文について —天理大学付属図書館蔵本の異本注記本文の紹介—	曾根誠一	68-76
	足羽敬明の五国史故事考について	細田季男	77-82
	『本朝無題詩』所収詩の享受—江戸期の諸書の一端から—	本間洋一	83-90
	『考訂今昔物語』と今昔物語集	加藤裕一郎	91-101
	伴林光平と『菅家遺誠』 —諸平歌論の『古今集』真名序評価を媒介にして—	中村一基	102-110
	前田利保と天満宮	綿拔豊昭	111-119
	日本書紀諸古写本に存する漢字による訓法について	尹幸舜	120-128
	陳述副詞の所属語弁別について	韓奎安	129-137
	〈紹介〉本間洋一著『本朝無題詩全注釈二』(新典社注釈叢書4)	小野泰央	138
	〈紹介〉菊地明範、綿拔豊昭編 『内山逸峰講釈、深沢常逢聞書 小倉百首大意』	岡本聡	138
	〈紹介〉請川利夫 野末明著 新典社選書7『高村光太郎のパリ・ロンドン』	畑佐章子	139

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	故大曾根章介教授略年譜・業績略目	—	140-149
	書庫—大曾根先生のこと—	豊田滋	150-151
	追悼 大曾根章介先生	宮崎和廣	152-153
	「私にとっての大曾根先生」	中屋健治	154-155
第38号／1995(平成7)年3月			
	万葉集の漢語「哀慟」をめぐる	板垣徹	1-10
	徒然草の章段配列について—諸本間の章段区分の相違—	池田恵美子	11-20
	井沢蟠龍における今昔物語集の受容	加藤裕一郎	21-30
	龍谷大学蔵『長嘯家集』の書き入れについて ～見せ消ち訂正補足書き入れと、慶安二年版本及び異本『挙白集』	岡本聡	31-39
	定家本の字音語表記についての一試論	木ノ内美保	40-48
	〈紹介〉大曾根章介著『王朝漢文学論攷—『本朝文粹』の研究—』	相田満	49
	〈紹介〉伊藤博著『源氏物語の基底と創造』	岩切雅彦	50
	〈紹介〉築島裕・石川洋子・小倉正一・土井光祐・徳永良次編 東京国立博物館蔵本『古今和歌集総索引』(古典籍索引叢書2)	小林恭治	50
	〈紹介〉今栄蔵編『芭蕉年譜大成』	山岸竜生	51
	〈紹介〉本間洋一著『本朝無題詩全注釈三』(新典社注釈叢書7)	中屋健治	52
	〈紹介〉目良卓著『啄木と苜蓿社の同人達』	橋本直	52
第39号／1996(平成8)年3月 築島裕教授古稀記念号			
	ひたすらに平らか築島先生	菅井時枝	2-3
	『朗詠』「三月尽」所収「留春不用関城固」について—橋在列小論—	小野泰央	4-11
	源氏物語研究における内部引用論—その基礎付けの試み—	五十嵐正貴	12-21
	『華嚴縁起』の「元暁絵」と「義湘絵」の詞書—『宋高僧伝』との比較—	兪仁淑	22-32
	月歌風体攷—長嘯子歌異質性の一側面—	岡本聡	33-40
	野衾考—鏡花文学における鳥妖の一類型に関する考察—	浅野敏文	41-49
	「カーライル博物館」私論—「カーライル」をめぐる三人の同類者—	崔明淑	50-59
	志賀直哉初期作品の一考察—『荒絹』を中心に—	金明姫	60-68
	図書寮日本書紀の同一本文における二訓の出典について—	尹幸舜	69-78
	「きえせぬ たえせぬ」考—語彙位相論における個別語史の意義—	原裕	79-89
	観智院本『三宝絵詞』における和語を表す漢字の用法について	徳永良次	90-103
	観智院本類聚名義抄の「一校了」について	小林恭治	104-114
	『諸国方言 物類称呼』に記述された福島県方言	佐藤秀明	左1-7 (130-124)
	韓日両国語における自動詞と他動詞に関する一考察 —「かわる」を中心に—	崔鍾勳	左8-16 (123-115)
	築島裕教授の思い出	小倉正一・木ノ内美保・ 大角芳葉・佐竹伸也・ 佐藤将傑・鈴木百合子	131-134

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
第40号／1997(平成9)年3月 第四十号記念特輯号			
	四十号刊行—草創期雑感—	菅井時枝	1-2
	文鏡秘府論小見—その構成を中心に—	大石有克	3-11
	兼明親王と『白氏文集』—閑適作品を中心に—	小野泰央	12-20
	早蕨巻・宿木巻における物語の揺れ	五十嵐正貴	21-31
	『発心集』私考—女人の執心像について—	李礼安	32-38
	評釈『四季物語』—正月—	尾坂隆之・金正凡・坂本優・高橋誠	39-51
	芭蕉と荘子とのかかわり—日本に於ける『荘子』を中心として—	許坤	52-60
	『一夜』論—「画」に纏わる「死」なるもの—	崔明淑	61-70
	絶頂期に於ける坂口安吾の鬼—「桜の森の満開の下」を中心に—	原卓史	71-79
	〈紹介〉築島裕著『平安時代訓點論考 研究篇』	原裕	80-81
第41号／1998(平成10)年3月			
	『発心集』私解—「母、女を妬み、手の指蝨に成る事」を中心に—	李礼安	1-8
	芭蕉に於ける「禪」の世界	許坤	9-16
	『徒然草』享受論—整板本出板状況をめぐって—	池田恵美子	17-26
	小泉八雲—『怪談』の世界	山栄理子	27-36
	泉鏡花論—桃花源に関する考察—	浅野敏文	37-47
	下人の行方と、語り手の「いま・ここ」—「羅生門」の言説分析の試み—	長谷川達哉	48-60
	東京大学国語研究室蔵 仏母大孔雀明王経仮名字音点	原裕	61-71
第42号／1999(平成11)年3月			
	もう一つの和泉式部日記—始発部はいかに語られていたのか—	金井利浩	1-8
	容貌を過剰に気遣う女君—大君について—	五十嵐正貴	9-19
	『讃岐典侍日記』—「あまたの女房」考—	太田たまき	20-28
	木曾上松宿武居家の蔵書・木曾上松武居家所蔵和古書目録	鈴木俊幸	29-43
	鏡花文学における画中の仙境に関する考察—「女仙前記」「きぬぎぬ川」について—	浅野敏文	44-54
	「白雲郷」の系譜—漱石の作品中の「理想郷」を探って—	祝振媛	55-63
	『坊っちゃん』の現在(いま)—「街鉄の技手」とは何か—	高原和政	64-71
	葛藤する『女』—坂口安吾『青鬼の禪を洗う女』論—	原卓史	72-79
	「折」、「頃」、「時」、「程」に関する—考察	金平江	80-89
	〈書評〉鈴木俊幸著『蔦屋重三郎』(近世文学研究叢書9)	坂本優	90-92
	〈紹介〉『日本漢文学論集』第一巻・第二巻 大曾根章介著	中屋健治	93-94
第43号／2000(平成12)年3月			
	『讃岐典侍日記』—小六条殿への初出仕—	太田たまき	1-8
	木曾上松宿武居家の蔵書(補遺)	鈴木俊幸	9-10

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	『八犬伝』受容に関する一考察—『世路日記』と訂正増補版『世路日記』—	磯部敦	11-19
	『吾輩は猫である』「六」の一考察—そのパロディーの問題を中心として—	崔明淑	20-28
	『朽助のみる谷間』試論—「私」と朽助との関係の推移—	申鉉泰	29-38
	疎開しないということ—『斜陽』論のために—	高和政	39-48
第44号／2001(平成13)年3月			
	文鏡秘府論の撰述事情	大石有克	1-10
	浮舟入水未遂の方法—〈命を巡る言葉〉と〈言い当て〉—	五十嵐正貴	11-19
	仏教説話の中での龍蛇と雨—龍蛇のとらえ方を中心に—	李礼安	20-27
	開化期「一口ばなし本」書目年表稿	中島穂高	28-32
	指標としての「赤い鳥」—「杜子春」の評価をめぐる—	頓野綾子	33-41
	観念からの脱却—横光利一『旅愁』試論—	木村友彦	42-50
	「トカトントン」論	金美亨	51-58
第45号／2002(平成14)年3月 菅井時枝教授古稀記念号			
	菅井時枝先生と書道	塚本康彦	1-6
	和泉式部日記の表現機構—最終贈答歌から散文世界をめぐる—	金井利浩	6-16
	源氏物語における伊勢物語引用—「若紫」の巻と伊勢・二・四段～—	佐竹純一	17-20
	玉鬘の物語の結末と鬘黒大将	逸見万年	21-28
	鳴滝音人小考—その初代と二代—	加藤隆芳	29-38
	粹狂連の地口本	中島穂高	39-46
	坂口安吾「信長」論	原卓史	46-54
	「魂(まぶい)」の声を聴け、語れ —目取真俊「面影と連れて(うむかじとうちりてい)」という〈暴力〉—	高和政	55-62
	狂言台本における「新地」と「新知」—その表記法について—	朝留和洋	63-72
第46号／2003(平成15)年3月			
	浮舟物語の形成と変容—その入水未遂事件以前—	五十嵐正貴	1-9
	それでも三話は〈並立〉する—「このついで」私見—	金井利浩	10-18
	『今昔物語集』に見る僧の修行と竜蛇—竜蛇のとらえ方を中心に—	李礼安	19-26
	蔵書研究の現在—甲州韮崎・瀧田家の蔵書を例に—	磯部敦	27-35
	中央大学所蔵印譜について—解題と小考—	加藤隆芳・浅埜晴子・ 五嶋靖弘・千坂英俊・ 徳武陽子・姜彦栄	36-47
	藤村の表現「嵐」考—『嵐』を中心に—	姜政均	48-56
	『青猫』前期の特徴から見られる『定本青猫』編集の問題 —『定本青猫』編集の際、削除された『青猫』前期詩篇を中心として—	黄珍	57-65
	『小僧の神様』—その「残酷」な関係—	頓野綾子	66-76
	『蓼喰ふ虫』考—人物造型を中心に—	羅勝會	77-87
	『珍品堂主人』論—珍品堂の失敗が意味するもの—	申鉉泰	88-97

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
第47号／2004(平成16)年3月			
	明石君と六条御息所—斎宮女御徽子との関わりから—	笹部晃子	1-10
	近世日本における大般若経流通の一相	鈴木俊幸	11-19
	予約出版の一側面—詐欺取財事件についての覚書—	磯辺敦	20-28
	戯作者と広告—式亭三馬店を例にして—	浅埜晴子	29-36
	中央大学国文学研究室所蔵漢詩集目録	浅埜晴子・五嶋靖弘・ 滝田裕子・亀井知子・ 木村綾子・藤林英樹	37-48
	夏目漱石『琴のそら音』の意義 —自己像描写とプロットの【相互関係】、 及び『文学論』『文学評論』に見るプロット観との比較	槐島知明	49-59
	太宰治「ろまん燈籠」論—ラプンツェル物語から窺われるもの—	小林芳雄	60-74
	「ヴィヨンの妻」論—語られる泥棒詩人—	姜辰根	75-83
	虎明狂言本に見られる表現意識の一問題—「がな」について—	朝留和洋	84-93
第48号／2005(平成17)年3月			
	助動詞「ぬ」と「つ」の意味—動詞「見ゆ」を中心に	金平江	1-12
	適うことのないく願(ねがい)—坂口安吾『女剣士』論—	原卓史	13-27
	『斜陽』論—かず子の「美(かな)しい」朝—	姜辰根	28-40
	日清・日露戦争関連の言語遊戯・俗謡書	中島穂高	41-59
	中村通夫先生を悼む	長崎健・山岡俊文・ 菅井時枝・杉谷正敏	60-62
第49号／2006(平成18)年3月 山口明穂教授古稀記念号			
	山口明穂先生を送る	池田和臣	1-3
	改編本系「類聚名義抄」注記配列パズル(二) —写本間における「区」項目の注記配列の異同に関する解釈—	小林恭治	4-17
	韓国の釈読口訣と日本の訓点資料に現れる返点について	尹幸舜	18-32
	万葉集における「ものを」の用法について	原裕	33-47
	「かぬ」に接続する助動詞「つ」—『三代集』の用例を中心にして—	金平江	48-54
	「含蓄」について	大牟礼誠	55-63
	『開化新聞』『石川新聞』の足跡 —明治初期石川県新聞事情研究のための基礎的考察—	磯部敦	64-74
	談義本『当世下手談義』の構造	五嶋靖弘	75-85
	甲州豪農層の文人交流—得月楼丘守とその周辺—	瀧田裕子	86-89
	山口明穂先生の思い出	板倉千佳・海老澤瑛・ 岡田美由紀・小林涼子・ 杉野智彦・津貫嗣宝・渡邊裕	93
第50号／2007(平成19)年3月 国文学会五十周年記念号・長崎健教授古稀記念号			
	「五十周年」ということ	長崎健	1-2
	長崎先生を送る	岩下武彦	3-5

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	長崎健先生の思い出	駒ヶ嶺泰暁・鈴木和彦・竹腰道子・野間範子・服部一枝・山岸竜生	6-17
	菅原道真の漢詩解釈臆説—交遊詩をめぐって—	本間洋一	18-25
	「をむな」のために—土左日記の表象と論理—	金井利浩	26-34
	十二世紀に至る詩歌論の展開—格式から詩話へ—	小野泰央	35-45
	韓国における「説話」と「説話画」—日韓の相違を探し求めて—	兪仁淑	46-52
	『発心集』研究文献目録	林雅彦・秋保義規・横山淳	53-68
	増鏡の後深草院—斎宮物語をめぐって—	濱中修	69-80
	義経英雄文学の主題と位相—お伽草子『天狗の内裏』の場合—	李鎔美	81-89
	『こほろぎ物語』をめぐる諸問題	岡本聡	90-100
	芭蕉と蕉門の門弟との距離	許坤	101-113
	蕪村「妹が垣根さみせん草の花咲ぬ」考	安保博史	114-120
	若山牧水の朝鮮旅行について	菊地明範	121-132
	賢治の時空—『銀河鉄道の夜』冒頭三章の検討—	竹腰幸夫	133-145
	天下茶屋再訪—続〈教材〉としての『富嶽百景』—	長谷川達哉	146-155
	原民喜「夏の花」論—「私」が「書きのこさねばならない」ことについて—	大高知児	156-164
	「みづ」と「みづほ」のオントロジー—「水穂」と「瑞穂」の選好意識—	相田満	165-175
	中央大学国文学会五十周年に寄せて	谷光忠彦	176-177
	中央大学国文学会創立五十周年記念行事プログラム	—	178
	中央大学国文学会創立五十周年シンポジウム要旨		
	シンポジウム	長崎健	179
	誰もやらないような研究対象を見つけませんか	本間洋一	180
	蕪村郷愁句群の発想源	安保博史	181-182
	国語国文学研究の現在と未来	熊木哲	183-184
	追悼 安川定男先生	長崎健	191
	追弔謝辞	池川敬司	191-192
	安川定男先生を偲んで	伊藤一幸	193-195
	安川先生の思い出	藤田裕子	194
第51号／2008(平成20)年3月			
	万葉集における不定疑問文について	大牟礼誠	1-10
	賦光源氏物語詩の表現形成について	小野泰央	11-23
	伝源通親筆狭衣物語切についての研究	千坂英俊	24-32
	後鳥羽院の水無瀬—その空間的特質について—	吉野朋美	33-45
	「信州西筑摩郡上松村字寢覚浦島旧跡臨川寺図」出版の顛末	鈴木俊幸	46-51
	坂口安吾年譜考証—教育・講談・身体能力をめぐって	原卓史	52-64

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	一九九〇年代以後の在日文学に関する一考察	金根成	65-75
	陽水を聴く—社会問題の歌	山下真史	76-86
第52号／2009(平成21)年3月			
	贈答歌における「恋死」表現—『後撰和歌集』を中心として—	矢澤由紀	1-13
	『蜻蛉日記』自己表出の方法	千坂英俊	14-23
	『後二条師通記』の漢詩文表現—古記録の記述と時令思想—	小野泰央	24-36
	中世詞書料紙装飾金銀泥下絵と和歌—「葉月物語絵巻」を中心に—	綿貫あいみ	37-49
	『あひゞき』における初訳と改訳—主体の変化と物語性—	鄭恵珍	50-61
	森鷗外「舞姫」と蔣防「霍小玉伝」との影響関係	李学義	62-72
	〈書評〉池川敬司著『宮沢賢治との接点』(和泉選書164)	頓野綾子	73
第53号／2010(平成22)年3月			
	伊勢物語第九十四段から久保惣本伊勢物語絵巻第三回へ —享受史からの一視点、もしくは絵画論・享受論への一視角—	金井利浩	1-9
	恋歌における「身を投ぐ」表現と入水伝承 —『大和物語』第一四七段を手がかりとして—	矢澤由紀	10-20
	『惟規集』評釈	池田和臣・徳武陽子	21-38
	中世禅家の和歌についての研究	千坂英俊	39-49
	五山文学の自注—『梅花無尽蔵』を中心に—	小野泰央	50-61
	夢野久作「瓶詰地獄」論—〈ずれ〉るコミュニケーション、その配列—	小金沢透	62-70
第54号／2011(平成23)年3月 渡部芳紀教授古稀記念号			
	兄のような人	宇佐美毅	1-3
	渡部芳紀教授の思い出		
	遠くて近い日々—渡部芳紀先生のご退官に寄せて	安藤恭子	4-5
	「無用」の豊かさ	石川紀子	6-7
	渡部芳紀先生の思い出	大高知児	8-9
	導かれる者として、いま、思うこと。	木村綾子	10-12
	あとがきの言葉 ～渡部先生の思い出	中川順一	13-15
	「渡部芳紀先生の思い出」	原卓史	16-17
	渡部先生との思い出	山崎真由美	18-21
	渡部先生のもとで学んだ日々	和田季絵	22-23
	『源氏物語』における故人—夢に「見える」夕顔—	横山勇氣	25-34
	『惟規集』評釈(二)	池田和臣・徳武陽子	35-54
	『御裳濯河歌合』二十四番の本文及び典拠についての一試案 —西行の恋歌と『源氏物語』—	矢澤由紀	55-64
	—韓智翊「山谷抄」の王安石観について	小野泰央	65-79
	新資料 浜松文芸館所蔵 子規稿評加藤雪腸俳句稿について	橋本直	80-90
	ブルカニロ博士とまことの幸福 —宮沢賢治先生の二つの文章を巡る非・文学的考察—	沢村鐵	91-97
	『山月記』再読—科挙の門をくぐった男・李徴の物語—	長谷川達哉	98-110

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	太宰治の「一貫」性？—その「批判精神」のありかについて—	高和政	111-119
	『惜別』論—登場人物の造形を中心にして—	佐藤隆之	120-153
	欠如態としての日本近代—中村光夫「『移動』の時代」をめぐって—	木村友彦	154-163
	「別の世界」の実体化、そして「狂気」 —大江健三郎の「空の怪物アグイー」を中心に—	趙軒求	164-177
第55号／2012(平成24)年3月			
	『惟規集』評釈(三)	池田和臣・徳武陽子	1-19
	弘前における芭蕉二百回忌について	綿抜豊昭	20-26
	大東急記念文庫蔵『伝慈円筆 詠法華経廿八品和讃』考	千坂英俊	27-37
	横笛相伝の意義—『源氏物語』柏木の横笛—	横山勇氣	38-48
	宮沢賢治 晩年の思想—晩年の改稿をめぐる—考察—	大場有里子	49-61
	坂口安吾「梟雄」論—斎藤道三の人物造型と作品の成立過程	原卓史	62-70
	〈講演録〉リアルとロマン—樋口一葉の文学—	関礼子	71-88
	追悼 馬淵和夫先生		
	馬淵先生の思い出	渡部芳紀	89-91
	馬淵先生追懐	金井利浩	91-92
	馬淵先生の時代	小林恭治	92-93
	追悼 築島裕先生		
	築島裕先生を偲ぶ	岩下武彦	94-95
	築島裕先生のご逝去を悼む	山岡俊文	95-96
	築島裕先生の思い出	杉谷正敏	96-97
	築島裕先生	原裕	97-98
第56号／2013(平成25)年3月			
	追悼 今栄蔵先生		
	今先生の「文学」	鈴木俊幸	1
	花木槿	綿抜豊昭	2
	『惟規集』評釈(四)	池田和臣・徳武陽子	3-16
	『源氏物語』「ゆかりむつび」小考 —『浜松中納言物語』と『狭衣物語』に及ぶ—	田村悦子	17-28
	『讃岐典侍日記』—「物の怪」描写の背景—	太田たまき	20-38
	『梁塵秘抄』における「頼もし」の表現について	瀧澤千絵	39-57
	大江健三郎『ピンチランナー調書』研究 —「調書」を「物語」に転換する「僕」、その二重性—	趙軒求	58-75
第57号／2014(平成26)年3月			
	伝寂然筆「具平親王集(中務親王集)」の新出資料	矢澤由紀	1-7
	『端白切本大式三位集』抄注	島田遼	8-23
	集句の起源—中・韓・日の比較文学として—	小野泰央	24-33

『中央大学国文』 目次情報

号／発行年月	論文題名	執筆者名	ページ
	半井桃水「胡砂吹く風」再考—初期小説の変化から—	劉銀炅	34-46
	藤村における「旅」と「漂泊」	北上桜子	47-61
	小林多喜二「師走」「最後のもの」の語り手における「生活する」ことの意味	梁喜辰	62-73
	推理小説としての『明治開化安吾捕物帖』	今田良介	74-89
第58号／2015(平成27)			
	「御前ゆるされたる人々」の文学 —「女房」の定義—	太田たまき	1-16
	語られない韓国 —「満韓ところどころ」の連載中止と関連して—	劉銀炅	17-31
	「地獄変」論 —「良秀」の屏風絵における達成と昇華、あるいは「大殿様」の失墜	駒ヶ嶺泰暁・大館瑞城	33-46
	小林多喜二の「安子」における女性人物の表現 —「党生活者」の笠原をめぐる「歪曲の言説」との関係から	梁喜辰	47-61
	大江健三郎『取り替え子 チェンジリング』論 —「生み直し」への軌跡—	下村朋世	63-76
	『枕草子』「おぼつかなきもの」章段の解釈 —配列に着目して—	清水真澄	77-86
第59号／2016(平成28)			
	麗花集 出典補遺考	池田和臣・矢澤由紀・ 細井彩香・河村朋美・ 後藤歴子・中村真実子	1-55
	『讃岐典侍日記』 —「託宣」する女房—	太田たまき	57-67
	与謝蕪村の「からざけ」の句の解釈について	綿抜豊昭	69-76
	『枕草子』「ありがたきもの」の国語学的解釈	藤原浩史	77-88
第60号／2017(平成29) 岩下武彦教授古稀記念号			
	お元気で	鈴木 俊幸	1
	「露と答へて消えなましものを」—『伊勢物語』第六段—	白瀬 真之	3-18
	誠光堂池田屋清吉の片影—文書からみる明治期貸本屋の営業と生活	松永 瑠成	19-35
	五十嵐梅夫・濱藻と俳諧一枚摺	塚本 照美	37-52
	『長能集』—二九番歌の「栗」について	徳武 陽子	53-58
	釈教歌の始原—「片岡山説話」についての考察	千坂 英俊	59-76
	中島敦「文字禍」の典拠詳解	山下 真史	77-90
	『枕草子』における命題形成	藤原 浩史	91-102
	岩下武彦先生の思い出		
	岩下先生との思い出をふりかえって	磯部 史子	103-104
	岩下武彦先生のご退官に寄せて	千坂 美樹	105-106
	岩下先生との思い出	大沢 寛	107-108
	「学問をするための態度」とは	北島 幸佑	109-110